



標準化は面白い

近澤 武 三菱電機(株)

筆者の経験を通して、標準化活動にまつわる話を2つ紹介したい。

■ 技術論と非技術論

標準化の議論は、正直言って学会のような技術論だけでは済まされない。もちろん、ベースは技術論であるが、国際規格を作成する過程で、各国・各企業の思惑がぶつかり、標準化作業が停滞してしまうこともしばしばある。そこで、自分の提案を通すために、非技術的な「根回し」や「仲間作り」が不可欠となってくる。自分の提案に賛同してくれる国・企業・人を増やすのである。また、「お互いに協力して提案していこう」とか「そちらの提案に賛同するから、こちらの提案に賛同してくれ」などの国際協調や取引／妥協も、時には必要である。

筆者はISO/IEC JTC 1/SC 27/WG 2 (暗号のアルゴリズムとメカニズムの標準化) の暗号アルゴリズム標準化 (ISO/IEC 18033) において、これらを体験した。暗号アルゴリズムは各国の暗号政策や国益に直接かかわるものなので、提案した国々は自国提案の規格化を強く主張した。各国が1票を持ち数回賛成／反対の意思表示をし、賛成多数の場合は承認される原則であるが、SC 27/WG 2では全体のコンセンサスを得るために、再度検討審議することがしばしば生じた。特に第三者に評価されていない暗号を規格に盛り込むか否かで紛糾した。提案国は国内標準だからという理由で、反対国は国内規格が必ずしも国際規格になる必要はない、国内規格のカタログではないという理由で、対立したのである。結局は、反対した国々が妥協し、日本も早期規格成立と国際協調という観点から盛り込むことに同意した。こうして当該規格が発行されるに至ったが、なんと規格化作業着手から5年もの年月が流れていた。

標準化は一筋縄ではいかないのである。しかし、標準化活動は大変なだけかという、そうでもない。このような困難を乗り越え、自分や自国の提案が国際規格になったときには達成感があり、また面白さも感じる。

■ ソーシャルイベント

もちろん、標準化活動自体以外にも面白いことがある。いろいろな国々を訪れ、いろいろな人々に出会い、貴重な体験ができることが、筆者の楽しみの1つとなっている。

標準化会合ではソーシャルイベントと称して、食事や観光、見学などを会合ホスト側が企画することが結構多

い。筆者が参加したソーシャルイベントで面白いエピソードの1つを紹介しよう。

昨年秋にマレーシアのクアラルンプールで国際会合があり、会合最終日の午後、世界で一番高いビル、ペトロナス・ツインタワーの見学があった。集合場所へ行ってみると、何やら見学者の振り分けを行っている。ツインタワーの係員は服装をチェックしており、ちゃんとした身なりの人だけにチケットを渡していたのだ。チケットを持ったフォーマル組はタワーの入り口へ移動して行った。カジュアルな人たちはそこへ取り残された。サンダル履きのSC 27議長やジーンズの筆者もカジュアル組である。ここでは、役職は関係ないようだ。皆口々に「ドレスコードがあるなんて聞いていないぞ!」と言いつつも、顔はにこやか。見学できないかもしれないというのに、カジュアル組はSC 27議長が自分たちと同じ境遇にいることを楽しんでいるのだ。SC 27議長のサンダルをネタに冗談を言い合っているうちに、他のWGのメンバとも会話を交わし、見学できるのを皆心待ちにしていた。かなり待たされた後に、フォーマル組とは反対の方向へ、ツインタワーなのでエレベータが2カ所あるのだ。展望フロアは2つあり、フォーマル組は上層、カジュアル組は下層であった。後から聞いた話であるが、フォーマル組には、土産物店での買い物時間が設けられたそうである。また、このツインタワーは日本と韓国の企業がそれぞれのタワーを建設したそうであるが、韓国側のタワーがやや傾いているという噂で、フォーマル組は日本側、カジュアル組は韓国側のタワーのエレベータを使用したようである。どこまで差別するのか?!と思いつつも、通常付き合いの薄い他のWGのメンバと交流ができて良かったと思っている。

ほかにも、パリのジャックマール・アンドレ美術館でのディナー、ワルシャワのショパン博物館でのピアノコンサート、マドリッドのプラド美術館での貸切り見学など、学会のソーシャルイベントとは異なる、数々の貴重な体験をし、他国の参加者や地元の人々との交流を深めている。

■ 標準化活動の勧め

以上、標準化活動の大変な面と楽しい面を筆者の体験から紹介させていただいた。

今このコラムを読んでいる方々に標準化活動に興味を持っていただき、ぜひ積極的に参画してほしいと願う。標準化は苦労もあるが、面白いのだから。

(平成18年6月1日受付)